Theater Association of KANAGAWA
TAK
DRAMA かながわ
NO.98
Theater Association of Kanagawa

TAK in KAAT「THRESHOLD」

劇団探訪：PAPmusic+
2026年度 神奈川県演劇連盟合同公演 情報
僕らの演劇：京浜協同劇団、ドリル饅頭、
劇団横濱にゅうくりあ、劇団唐ゼミ☆
資料室だより ほか



TAK in KAAT
『THRESHOLD』
2026年4月23日(木)～26日(日)　KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ



【総評】緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）

KAAT 神奈川芸術劇場大スタジオにて、TAK in KAAT『THRESHOLD』を上演いたしました。

演劇プロデュース『螺旋階段』、theater 045 syndicate、劇団スクランブル/クェル・ペッパー、劇団820製作所の四団体が参加し、同じ舞台装置を用いてそれぞれ30分の作品を創作・上演するという試みに挑戦しました。

神奈川県演劇連盟ではこれまで、神奈川県演劇フェスティバルやかながわ演劇博覧会など、加盟団体がそれぞれの個性を発揮する場を数多くつくってきました。今回の『THRESHOLD』は、その流れを受け継ぎながらも、単なる合同公演ではなく、共通の条件のもとで、それぞれの創造性がどのように立ち上がるのかをテーマとした企画でした。

企画タイトルの『THRESHOLD』は「敷居」「境界」を意味します。舞台には三つの扉と四つの柱を配した共通セットがありました。同じ空間を前にしながらも、各団体が描いた世界は驚くほど異なっていました。ある作品では孤独な女性の内面が描かれ、ある作品では不条理な笑いが展開され、また別の作品では哲学者と女性の物語が描かれ、ある作品では理想の結婚相手探しが大変な事になりと、様々な作品が生まれました。観客の皆様には、舞台装置が変わらないにもかかわらず、その向こうに広がる世界が作品ごとにまったく異なるという演劇ならではの魅力を体験していただけたのではないかと思います。

プロデューサーとして今回最も大切にしたのは、「競争」ではなく「共創」の場をつくることでした。同じ条件で作品を創ると聞くと、どうしても比較や優劣に目が向きがちです。しかし私たちが目指したのは、異なる創作手法や価値観が一つの企画の中で共存することでした。稽古や打ち合わせを重ねる中で、それぞれの団体が互いの創作に刺激を受けながらも、自らの個性をより鮮明にしていく姿を見ることができました。

また、今回の企画では、団体の垣根を越えた交流も数多く生まれました。演出家同士、俳優同士、スタッフ同士が情報や経験を共有し、新たなつながりが育まれていく様子は、まさに神奈川県演劇連盟が目指してきた「地域演劇のネットワーク」の一つの理想形だったように感じています。作品そのものだけでなく、創作の過程においても大きな成果を得ることができました。

神奈川県演劇連盟は、1970年代から半世紀以上にわたり神奈川の演劇文化を支えてきました。TAK in KAATも、KAAT 神奈川芸術劇場の開館以来続く重要な事業の一つです。私たちは単に公演を実施するだけでなく、地域で活動する劇団やアーティストが出会い、新たな挑戦を行い、その成果を社会に発信する場をつくることを使命としています。

近年、演劇を取り巻く環境は大きく変化しています。観客層の多様化、創作環境の変化、社会課題との向き合い方など、私たちはさまざまな課題と可能性の中にいます。しかしその一方で、演劇には人と人とを結びつけ、新しい視点を生み出す力があることを改めて実感しています。今回の『THRESHOLD』は、その可能性を再確認する機会となりました。



ご来場くださったお客様、参加団体の皆様、スタッフの皆様、そしてKAAT 神奈川芸術劇場をはじめとする関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

一つの舞台装置から四つの物語が生まれたように、これからも神奈川県演劇連盟は、多様な創造の「敷居」を越え、新たな出会いと挑戦の場をつくり続けてまいります。神奈川の演劇文化がさらに豊かに広がっていくよう、今後ともご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

雨風激しい春の嵐の夜、4月23日の初日。悪天候をものともせず、KAAT大スタジオのオレンジシートは多くの観客で埋まった。「THRESHOLD（スレッショルド）」とは敷居・境目・出発点を意味する。同一の舞台装置―三つの扉―を共有しながら、神奈川県演劇連盟の四団体がそれぞれ30分の物語を立ち上げるという実験的オムニバス公演だ。

■theater 045 syndicate「鹿」
【脚本・平塚直隆（オイスターズ）、演出・中山朋文】
修学旅行のバス車内を舞台に、柔和な運転手（中山）と後部座席に残る男子学生（今井勝法）の奇妙な対話が展開する。多くの登場人物を音声のみで表現し、想像力を喚起する構成は、出演者3人以内という「劇王」発の制約から生まれた逆転の発想だ。シューベルトの「魔王」が父娘の関係に接続され、終盤に扉から現れる鹿の角を持つ女生徒（北澤小夜子）が謎を深める。
「まるで誰もいないようだ」という運転手の最後の言葉が、現実と幻の境界を揺るがす。中山さんの父性をにじませた演技が不条理劇を笑えるものに保ち、今井さんの爆発力を引き立てた。わずかな出番ながら北澤さんは神秘的存在を具体化させ、1人残る結末の静けさを効果的に際立たせた。




■劇団820製作所「物語の書き方」
【脚本・演出・波田野淳紘】
哲学者ハイデガーとハンナ・アーレントをそれぞれ三人一役で演じるという大胆な構造が、脳内会議の様相を生み出す。時代を超えた回想録の中に全員が同時に存在するという仕掛けは、ハイデガーの「存在と時間」をそのまま舞台に体現したかのようだ。作家の特徴である詩的モノローグが複数の役者の対話によってダイアローグへと転換される発想の転換も鮮やか。
ハンナ1である安藤麻吹さんのタイプライターの音の緩急が劇の呼吸を司り、小谷真一さん・朝廣亮二さん・亀尾建史さんがそれぞれ異なる時代のハイデガーを、馬場玲乃さん・江花実里さんが葛藤の深度を変えながらハンナ2と3を演じ分けた。ハンナの学友を演じた加藤好昭さんと、伴侶を演じた小山利英さんは、ハンナに寄り添いながらもハイデガーとの関係以上の深さには踏み込めない微妙な距離感を保ち、劇の主題を補完した。
劇団820製作所の新境地といえる充実した出来栄えだった。




■劇団スクランブル/クェル・ペッパー「presentation」
【脚本・演出・坪井俊樹】
不条理・哲学と続いた後の「箸休め」と作演は謙遜するが、観客の頭が高負荷に陥るタイミングで肩の力を抜かせるコメディは公演の要だ。脳内を視覚化する装置のプレゼンテーションという設定で、舞台と客席の境界を破る場面から笑いが生まれる。
テイストは変えず、いつもよりも圧縮した中でもキャラクター造形は確かで、竹内もみさんの自己中心的だが憎めないプレゼンターと、中島玲奈さんの冷静沈着なアシスタントの対比が軸となる。装置のサンプルに選ばれた客の脳内から扉を経て現れる三人の女性を、新菜鈴果さんが小悪魔的なかわいらしさと面倒臭さで、環ゆらさんがゴージャスでミステリアスな佇まいで、磯村アコさんが庶民的な愛嬌で演じ分け、鮮やかな対比を生んだ。中根道治さんの巻き込まれ型の人物造形と、伏線として機能した市原ユウイチさんの身体を張った存在感も笑いの核となった。
舞台美術を全て使い切ったのはこの作品だけという職人的な采配も印象的だった。




■演劇プロデュース『螺旋階段』「明日、また、明日。」
【脚本・演出・緑慎一郎】
外に出られない中年女性（村井彩子）を囲む怪しげな四人組。一体何事かと思いながら次々と話が転がり、これは、女の脳内で起こる心象風景を通じたカウンセリングなのだと合点がいく。企画コンセプトを最も色濃く映した締め括りにふさわしい作品だ。
村井さんの繊細な芯を持った演技が、外へ向かう前の傷つきやすい状態を的確に表現し、ナカムラユーキさん・内海詩野さん・岡本みゆきさん・木村衣織さんが早着替えで何役もこなして過去と現在、空想と現実を往来し、飽きさせなかった。
照明と音響のスタッフワークも際立ち、選曲と効果が緑氏の世界観に深く寄り添っていた。




■総評
扉の使い方も四団体それぞれで、異界の入口・終幕の明示・選択肢・心理的拒絶の象徴と、同一装置から異なる意味を引き出した。四作品すべてが「脳内で起こる想像・幻覚・錯覚」を扱うという一本の筋も通っている。
舞台は好評であったが、あえて今後の検討課題を挙げるならば上演時間ではないか。130分ノンストップは情報量の多さも相まって観客の集中力に負荷をかけた。途中休憩の設置や、全体を100分に凝縮する構成も今後の選択肢になりうるだろう。
それでもこの公演は、神奈川県演劇連盟の現在地を示す先端であり、新しい時代の境界を越えた記念碑的な一夜となった。

文：こんのかつゆき（劇団コピュラ）

劇団探訪

PAPmusic+



■PAPmusic+とは

PAPmusic+は、2009年にスタートした音楽・ダンス・舞台を専門的に学んだ経歴を持つ者と賛同し協力する者で構成された団体です。年齢を問わず、生音や舞台のライブ感を身近に体感出来る音楽イベントや通常「聞く・観る」の『受け身側』では感じる事がなかなか出来ない舞台や演奏を、参加者が実際に演奏やパフォーマンスに参加する事で感じる『当事者』として体験することで、より具体的に音楽を楽しむ方法を感じる事が出来る企画運営を行なっています。

■PAPmusic+の名称の由来

PAPmusic+の名称の由来は、Performance All Pops（パフォーマンス・オール・ポップスの頭文字をとって「PAP」で、ポップスは「一般に」「親しみやすい」という意味があり、「music=音」を基としたパフォーマンスを行なう団体であれば、どのような形式でもコラボ参加出来る企画を目指しています（音とは、音楽としての形態ではなく、体から発する声や振動・身体表現を含んでいます）。また、今後、色々な可能性や試みを展開していく運営を目指す為「+」を名称に取り込んでいます。

■地域に根差した活動

スタッフメンバー各々が主婦で母という立場と経験を生かし、神奈川県県央地域の綾瀬市他近郊の公共施設・団体などへの指導や若い世代への育成にもあたっています。



■主な活動実績

2011年から3年間は、小さなお子様～ご年配まで一緒に楽しめる音楽イベント「PAP ミュージックサマーフェスティバル in あやせ」を企画し、綾瀬市きらめき補助金・あやせの輪基金の助成を受け交付事業として開催。この企画に市内外で活動している11団体が出演参加しました。

2012年には東京ディズニーリゾートのクリスマススペシャルイベントオーディションに合格しボーカルコーラスショーに出演したり、2019年には水谷千重子（友近）コンサート綾瀬市公演にバックダンサーの振付指導をし綾瀬市内出身のダンサーたちが出演しました。

■地域との連携活動

綾瀬市内では、子育て団体と絵本読み語りコンサート（歌と芝居と映像がコラボしたコンサート）を演出し出演したり、民官合同開催の市イベントにバンド＆ダンスをコラボさせたステージを企画し出演してきました。

他にも、綾瀬市の公認ゆるキャラ「ブタッコリ～」のイメージソング「ブタッコリズム」を作詞作曲。ゲストボーカリストと共にユニット”Acchi-Kocchi”を結成し、ゆるキャラのイベントステージにライブ出演などで地域を盛り上げています。



■ミュージカル体験ワークショップ

2014年からはミュージカル体験ワークショップ（全10回のワークショップで地域の市民芸術祭ステージに出演するプログラム）をほぼ毎年続けています。

■市民ミュージカルへの挑戦

このミュージカル体験ワークショップ企画に参加したキャストから、長編作品にチャレンジしてみたいという声があがり、2025年12月に、PAPmusic+主催の市民ミュージカルであるPAPmusicalLABO「ケサランパサラン～わたしはあなたのなかに」を企画し、1年間の作品稽古を経て綾瀬市オーエンス文化会館小ホールでの公演が実現しました

この作品の楽曲提供に協力いただいた大光寺圭さんは綾瀬市出身でメジャーデビューされたシンガーソングライターで、地元の風景を歌詞に込めた楽曲を多く配信しています。

■今後の取り組み

綾瀬市では鉄道の駅が無く外部からのアクセスが不便なところがあり、演劇文化がなかなか定着せず馴染みも薄いと感じているので、地域で演劇や舞台に参加する垣根が低くなるよう、これからも地域の文化活動に積極的に挑戦していきます



活動内容や公演情報など、
詳しい情報はホームページに掲載しております。
ぜひご覧ください。
https://papmusicplus.jimdofree.com/

2026年度 神奈川県演劇連盟合同公演 情報

■2026年度合同公演に向けて

神奈川県演劇連盟が神奈川県立青少年センターとの共催で行う公演です。TAKの各事業の中でも、合同公演は多くのお客様に作品を見ていただける公演です。

合同公演は加盟団体が、団体の枠を超えて集うお祭りという意味合いもあり、様々な価値観や方法論をもつ団体が作品づくりを通して交流することができる魅力的な公演です。

TAKの総力を結集し、プロ・アマ問わず、参加者もお客様も楽しめるクオリティの高い公演にできるよう、出演者・スタッフ一同、力を合わせて臨みたいと思います。

2026年度の合同公演は2027年1月。コロナが明けて4年、中山が演出を担当するようになり4度目の合同公演です。



脚本担当：須藤旭(虚空環幻想レーゲンハイト)

■本年度の合同公演は・・・

今回は須藤旭さん(虚空環幻想レーゲンハイト)が脚本を担当し、演出は引き続き中山(theater 045 syndicate)が担当します。

例年、合同公演の脚本担当は加盟員より立候補を募り選出しています。本年度も複数団体からの立候補がありましたが、その中での最年少であり、また過去4年の合同公演とはまた違ったカラーを持つ須藤さんに脚本を担当していただく事にしました。

須藤さん率いる虚空環幻想レーゲンハイトは「どんな過程を経ても最後には笑顔で、明日への活力になるモノ」をモットーに、アクションやダンスをふんだんに取り入れたエンターテイメント性の高い作風が持ち味。これまでの合同公演でも個性の強い脚本を演出してきた中山と、どのような化学反応が起きるのか？

■対談：脚本/須藤旭、演出/中山朋文の初タッグ

【中山】お互い、顔を見知ってからの期間は結構長いような気がしています。当初は「なんかデカい奴がいるな」と思ってました(笑)。

【須藤】自分も今までの神奈川にはいないタイプの人だと思ってました(笑)。自分は演劇系の専門学校在学中に神奈川の演劇人の先輩方に出会い、そのまま手伝いを始めて仕事になっていきました。そんな中で自分のやりたいことをやるために設立したのが虚空環幻想レーゲンハイトです。

【中山】須藤さんの劇作はいくつか拝見していて、自分が今まで見てこなかったタイプの演劇を作っている、ある意味、平成後期からのいわゆる「2.5次元」的な世界観だと認識していました。

【須藤】そうですね。自分は演劇の非日常性に一番惹かれていて、そこに高い熱量が加わった芝居が一番好きなんです。そういった面でエンタメ系の演劇を作りたいと思っています。

【中山】近年「エンタメ系」という言葉が演劇でもよく使われていて、「エンターテインメント」の定義がより細分化されているように思うのですが、非日常性と熱量は演劇の普遍的な面白さだと思っているので、世代は違っても面白がれるポイントは同じなんだろうね。

【須藤】『ドラゴンボール』のように、どんな世代の人でも楽しめる作品を作っていきたいです。自分の書いた本を人に演出してもらうという経験が今回初めてなんです。

【中山】それは私にとっても光栄です。日本では「作・演出」が同じケースがとても多く、小劇場ではほぼそのスタイルです。このやり方はダイレクトに作家の意図が俳優に伝わりやすいということがある反面、書き手としての能力と演出としての能力にギャップがあった場合、演出できる範囲のことしか書けなくなったりして、戯曲としてのスケールが小さくなってしまうことがあります。僕は演出家の一番の仕事は、脚本の面白さを伝えることだと思っています。作家が思いもよらない世界を作って、驚かせたいし喜ばせたい。だから思いっきり好きなことを書いて欲しいと思っています。

【須藤】それはすごく楽しみです。反面、合同公演という大きな舞台でのプレッシャーもあります(笑)。演者の皆さんにも書き手の想像を超えて欲しいです！

■今回の合同公演

出演者も加盟団体のみならず、30名近くの参加者が集まってくれました。年齢層も幅広く、紅葉坂ホールという大きな舞台で、多様な価値観を持った神奈川演劇人たちが1つの作品を作り上げ、躍動します。

■今回のタイトルは

『ЯED SHOES ～横濱奇譚～』（レッドシューズ ～よこはまきだん～）。童謡「あかいくつ」に秘められた謎、街に散らばる異界の扉、横浜の怪異を追う“都市伝説アクション群像劇”‼

今年も何が飛び出すかわからない合同公演、乞うご期待！

文：中山朋文（theater 045 syndicate）



初タッグを組む中山朋文(左)と須藤旭(右)

2026年度 一般社団法人神奈川県演劇連盟 合同公演
『ЯED SHOES ～横濱奇譚～』
（レッドシューズ ～よこはまきだん～）

日程：2027年1月22日(金)～24日(日) 全4ステージ
会場：神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール
脚本：須藤旭（虚空環幻想レーゲンハイト）
演出：中山朋文（theater 045 syndicate）
チケット料金：一般 3,500円（前売り・当日共に）
U18チケット 1,500円
※11月初旬チケット発売開始予定

僕らの演劇

京浜協同劇団「少年口伝隊一九四五」
2026年8月1日(土)～2日(日) スペース京浜




2026年7月30日、私は京浜協同劇団の劇場兼稽古場であるスペース京浜を訪れた。本番を観られない人向けにゲネを観られると連絡を頂いたからだ。それにしても、この劇場はいつ来てもいい小屋だと思う。

さて、本題に入ろう。私は『少年口伝隊一九四五』という本を知らなかった。ただ、チラシには原爆ドームの写真が使われており、広島というキーワードが書かれている。そして、8月に京浜が選んだ演目だということで原爆や戦争に関する話だということは直ぐにわかる。

出演者は京浜のベテランと新人、客演のベテランと新人と幅広く、年齢も幅広いのだが、これがまたいい味を出している。

芝居が始まり冒頭、出演者が客席側の通路から「ヒロシマコール」を言いながら舞台に向かっていく。これから始まりますよというご挨拶と共に観客を集中させる効果が非常によい。ちなみに「ヒロシマコール」は実際に広島にある地名や川、橋、名産品をランダムにコールするもので、今回の参加者が思いつくものをピックアップし、公演用に創作したものとのこと、面白い発想だ。

さて、物語は原爆が落ちる少し前から始まる。メインとなる少年3人が原爆を受け、被爆しながらも生き残り、どのような生活を送り、なぜ口伝隊となったのか、どのように生きたのか、そして、どのように死んでいったのかが描かれている。知らなかった原爆の実態、終戦後にも続く戦争の爪痕、その後を広島の人たちがどのように生きていたのかが鮮やかに繊細に描かれており、それを演者たちが真剣に向き合う、そして紡がれる言葉に、流石『京浜協同劇団』と言わざるを得ない。

惜しむらくは、演者の目線が合っていなかったのではないかという部分。物理的な目線や感覚的な目線。個々がそれぞれに想いをもって演じるのは良いが、どうしても意識や感覚がバラバラに感じてしまう。物理的な目線としてもその役たちが今何を感じて、何を見ているのか、そこまで拘れば、まだまだ昇れる。

最後となるが、本作のメインとなる「口伝隊」とは、原爆によって新聞を発行できなくなった新聞社の人々がそれでも新聞記事を人々に届けなければいけない、という想いで、様々な場所を回り口伝によって新聞記事を届けていた人たちのことで、戦時下における綺麗事であっても、それを伝える役割を果たしていた。そんなことは教科書では教えてくれなかった。原爆が投下され約14万人の人々が命を落としていった。その事実の中で必死に生きていく人々の姿を克明に描いたこの作品は、今後も語り継がなくてはいけない。そして『伝えて』いかなければいけない。京浜協同劇団には、これからも忘れてはいけない事の『伝え手』であって欲しい。

文：海老名信吾

ドリル饅頭「桃燕飯店～煥発～」
2026年8月6日(木)～9日(日) 横浜人形の家 あかいくつ劇場

タイトルにもなっている『桃燕飯店』という横浜にある架空の街中華屋が舞台。店主が亡くなった事を機に客足が遠のいてしまい、残された家族達が一念発起、店の再起を掛けたお話。と、ここまで読まれた方は、ハートフルでウォーミングでワンスアゲインなお涙頂戴なお話を想像されるかもしれませんが、全然違いました。

いい意味でも悪い意味でもとても滑稽無糖な展開。というかほぼテンションアゲアゲな展開やシーンの連続で、「なんで？」「どうして？」のオンパレードのまま、容赦無くストーリーが進行していきます。何より、冒頭で亡くなった中華屋店主、良い地縛霊としてすぐ出て来てずっといるし。こういう材料でどんなお話が始まるのか、ツカミはばっちり。でしたが,,,。

まず、出てくる登場人物は全員といっていいほどいい人な狂人で、人間味を感じることが出来ず共感できるポイントが少ないので、そこはもっと勢いや熱量や、テンポに振り切った方が、見やすいと思いました。芸達者な役者さんばかりなのに作品の方向性（どう見せたい見られたい）がバラバラな印象を受けて、役者さん達の熱演についていけず。

ドラマ部分もお涙頂戴とはならなくカラッとしていましたが、熱量で乗り切るのか、ウェットに魅せるのかが曖昧で、逆に長く感じてしまいました。

何より亡くなった中華屋店主が誰にも見えない幽体として舞台上にはいるんですが、登場人物の誰一人として認識できてない、そしてコミュニケーションも取れないので、まさに浮いた存在になってしまってもったいないと思いました。店主の店、味、家族に対する思いと、家族達の今現状の行動と思いのギャップがもっと引き立てば、笑いやドラマに入り込みやすかったのかなぁと。見ていて、一番人間味のあるキャラクターが店主と思いましたし、亡くなった人が実際出てくるので、そこはやっぱりなんか、すれ違いでまた一波乱を期待しちゃいました。

総じて、くっだらない（褒め言葉）作品を目指したと思うんですが、消化不良というか、次々展開されるシーンの期待感を実際行われてるシーンがそれを上回らなかったという感じでした。とは言いつつ、フォローのつもりもなんでもなく、90分間の作品の中で「次は？」「え？こういう展開？」とハラハラドキドキ楽しんでたのは事実です。

歪な構成の脚本、ゴリ押しパワータイプな演出、ギミックが多くて見飽きないセットの転換や、映像、音楽、歌、ダンス、芸達者な役者さん達と、めちゃくちゃいい物だらけを揃えてるのにストレートに表現しないで、歪でヘンテコリンなお芝居にしているのは他にはなく、ドリル饅頭のお芝居って、「変なの～ウケる～」「贅沢な遊びしてるな～いいなぁ～」と良い意味でのモヤモヤとある種爽快な気持ちで劇場を後にしました。

文：坪井俊樹（クェル・ペッパー）




劇団横濱にゅうくりあ「ヨコハマのともしび、それぞれの愛」
2026年9月5日(土)～6日(日) スペース・オルタ




本作品は、横浜新山下にある「うたごえ喫茶ミナト」を舞台に、さまざまな人々の人生や愛の形を描いた心温まる物語である。観劇後には、人と人とのつながりの大切さや、時代を超えて受け継がれる思いについて深く考えさせられた。

特に印象に残ったのは、高度経済成長期の横浜という時代背景である。戦後復興を遂げた日本が経済発展を続け、人々が明るい未来を信じて懸命に生きていた時代の熱気が舞台全体から感じられた。港町・横浜は古くから海外文化の玄関口として発展してきた街であり、その活気や開放的な雰囲気が登場人物たちの生き方や価値観にも色濃く反映されていたように思う。一方で、社会が急速に変化するなかで生まれる不安や葛藤も描かれており、高度経済成長の光と影の両面を感じることができた。私は高度経済成長期が終わった後に生まれたため、その時代を直接知っているわけではない。しかし、当時の映像や書籍などを通して感じるのは、多くの人々が「明日は今日より良くなる」と信じることのできた時代だったということである。本作品からも、そうした前向きなエネルギーや、人々が未来に希望を抱きながら生きていた時代の息吹が伝わってきた。

また、「うたごえ喫茶」という設定が非常に魅力的だった。発祥には諸説あるが、1950年頃の東京・新宿で、店内に流れるロシア民謡に合わせて客が自然に歌い始めたことが始まりともいわれている。また、当時公開されたソ連映画『シベリア物語』の影響を受けたという説もある。当時のうたごえ喫茶は、多くの人々が歌を通して交流し、励まし合う場であった。

高度経済成長期の歌と聞いて私が思い浮かべるのは、坂本九の「上を向いて歩こう」や「明日があるさ」である。これらの楽曲には、苦しい時代を乗り越え、未来へ向かって前向きに歩もうとする人々の希望やエネルギーが込められているように感じる。劇中の人々が歌を通じて心を通わせる姿からも、音楽が持つ力や、人と人を結び付ける温かさが伝わってきた。

登場人物たちが抱える「愛」の形はそれぞれ異なる。しかし、家族愛、友情、恋愛、地域への愛情など、その根底には誰かを大切に思う気持ちが共通して流れており、それが物語全体を優しく包み込んでいた。時には笑いを誘い、時には胸を打つ場面もあり、観客は自然と登場人物たちに感情移入してしまう。作品タイトルにある「ともしび」は、人の心の中にある希望や愛情を象徴しているのだと感じた。

第70回記念公演にふさわしく、本作品は横浜という街の歴史と、その時代を生きた人々の記憶を鮮やかによみがえらせる舞台だった。高度経済成長期を知る世代には懐かしさを、私のようにその時代を直接知らない世代には当時の人々の生き方や価値観、そして未来への希望を伝えてくれる作品である。観劇後には心に温かな余韻が残り、家族や友人など身近な人とのつながりを改めて大切にしたいと思わせてくれる内容であった。

文：オッスたかのり（劇団かに座）

劇団唐ゼミ☆「ベンガルの虎」
2026年10月7日(水)～12日(月) 沢渡中央公園 特設青テント劇場

『ベンガルの虎』は、『ビルマの竪琴』の水島上等兵の後日談といえるのだろうか。私が観た1985年版の映画ですら、小学校に上がる前のことだ。それでも脳裏に焼き付いているのは、僧侶となった水島上等兵の姿だった。戦地で無数の日本兵の死体と出会った水島は、故国へ帰ることを選ばず、現地で本物の僧侶となった。その水島が、この舞台では、ビルマの白骨街道に散らばる日本兵の骨をハンコの材料として密輸する商社マンとして描かれる。あの水島が、なぜ。戦争が終わったあとも、戦地に残されたものは何だったのか。

物語の舞台は、錦糸町の怪しげなハンコ屋。かつて学校の先生だったホステスのカンナが訪ねてくる。彼女が探しているのは、ビルマの戦地から夫の水島が送ってきたはずの象牙のハンコだ。しかし、待てど暮らせど夫は帰らない。彼女の大切な定期券は、なぜか十五年以上も前の「昭和32年」で止まったままだ。ハンコ屋の主人・俗物博士は、死んだ兵隊の骨でハンコを作り、暴利を貪っている。そして、カンナが待ち続けた夫の水島は、冷徹な商社マンとして帰ってくる。だが、彼には別の妻がいる。カンナの記憶さえも疑われ、彼女が信じてきたものは、足元から崩れていく。

二幕冒頭、花月園競輪場。青テントが開き、その向こうに外の景色が見える。走り抜ける自転車に驚かされる。舞台の内と外の境界が揺らいだかと思えば、水の中からカンナの母親が現れる。目の前で起きていることを理解しようとしても、理解が追いつかない。行李の中の白骨。母の白骨は、何度も行李に入れられ、場所を移される。そして、カンナ自身も行李の中に入る。行李に入るとは、何を意味しているのだろう。カンナはどこで生まれ、どこで生きてきたのか。彼女が待ち続けているものは、いったい何なのか。答えを探そうとするほど、物語は深い闇へと沈んでいく。流しの銀次とカンナは、一本の紐で結ばれている。その紐は何度も切られ、それでもまた結び直される。日蝕。虎の遠吠え。銀次は月光仮面へと姿を変える。そして、カンナの叫びとともに崩れ落ちる舞台装置。横浜の夜景の中へ、カンナたちは消えていく。

唐十郎の描く世界を、頭で理解しようとするだけでは追いつかない。目の前に現れる光景に身をさらし、言葉にならないものまで受け止める。そんな観劇体験だった。

水島カンナを演じた津内口淑香の一挙手一投足から目が離せなかった。そして、今井勝法の熱量に胸が躍った。俳優たちの身体から放たれる熱と、テントという空間そのものが持つ力。その二つが重なり、舞台は最後まで観客を圧倒した。

青テント、お疲れ様でした。日本が負け、戦争が終わった。それが歴史の事実だとしても。戦争で人が死ぬことに意味などないのだとしても。あの時代、死に場所を戦地に定めた人たちがいたことを、私たちは忘れてはならない。

死者の骨がハンコとなり、誰かの記憶が疑われ、時代に取り残された人がなお誰かを待ち続ける。『ベンガルの虎』の舞台に漂っていたものは、過去の戦争の残響だけではなかったのかもしれない。あの時代の風が、横浜に吹いていました。

文：緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）





資料室だより

演劇資料室からオススメの一冊
「役者なんかおやめなさい」
（仲代達矢 著、坂梨直子 聞き手／サンポスト出版）

俳優の仲代達矢は、2025年11月に92歳で急逝した。「肝っ玉おっ母と子供たち」の何度目かの再演に向けた稽古中であった。このブレヒトの作品は、1953年に千田是也が日本語訳を発表、翌54年にくるみ座が初演した。1988年、無名塾バージョンとして隆巴（妻である宮崎恭子）演出で、仲代が主役の肝っ玉おっ母の役で初演して以来、レパートリーの一つとなっていた。この作品の底流につながる想いとして、子供時代の壮絶な体験があったのではないだろうか。仲代は、1945年3月の東京大空襲を経験しており、その頃新宿の真ん中で焼死体がごろごろしている中、歩いて学校に通っていたという。そして大空襲の少しあと、山手空襲というのがあってそれに遭遇した仲代は、焼夷弾が降ってくる中を逃げまどい、たまたま出くわした10歳くらいの女の子の手を引いて一緒に逃げた。逃げている途中でふっと握った手が軽くなったのに気づき、振り返った。女の子の体はなく、腕一本だけ握っていたという。

こうした幼少期さらには青春の時代を経て、仲代の心根には愛国主義という言葉の持つ欺瞞性が色濃く根付いていたのだろう。時代への抗いの象徴ともいうべき新劇の世界に向かったのも、必然であったのかもしれない。もっとも若い頃から演劇、役者の道を目指していたわけではなく、いろいろ人生の選択に迷っていた。そもそも芸能界という言葉にはなにがしかの軽薄さを感じていたようで、そっちに行くのは選択肢にはなかったらしい。ところがある人から「顔がいいから役者になれ、背も高いし」と言われたのが引っ掛かっていた。またその頃欧米から多くの映画作品が入ってきて、どれも底辺に「生きるとは何か」というテーマが流れていて、そのことにシンパシーを感じていたのだともいう。それで、映画のチラシなど見ると、どの俳優も演劇学校というのを出ていると知った。こうして俳優座養成所の門を叩くこととなる。

仲代の役者としての足跡、あるいは人となりを読むのも面白いが、それ以上に興味を惹かれるのが、映画人や演劇人との会話である。例えば、「乱」を撮った時に黒澤と交わした言葉。黒澤はこの作品を自分の遺言だといった。「親子ですら戦うんだ。神から見れば人間なんて愚かなもんだ。世界中で戦争は絶えないし、人間が滅亡するまで戦争はなくならないだろう。その愚かさを描いたつもりだ。」安部公房との会話も面白い。曰く「芝居が終わっての観客の拍手、アンコールの掛け声。あれ、みんな本気でやってるわけじゃないんだよ。例えば上手く演じたとして、嫌いな役者に対してならとりあえず拍手する。逆に好きな役者だったら、下手だったとしても一生懸命に手を叩く。」そして、仲代自身の次の言葉は、我々芝居を志す者が肝に銘じておきたい言葉ではないだろうか。「この役は色で言うと、何色なんだ？どういう服装をしてどういう歩き方をするんだ？目の使い方は？そんなことまで考えて役作りしろ。そして一つの役だけじゃダメ、いい役だけじゃなく悪役も含めて1ダースはやれ…」演劇養成所とは、そういうことを叩きこんでくれる所なんだと改めて知らされた思いがした。それは訓練という意味だけではない、自分自身の役者としての感性と完成度を高めてくれる、ひいてはもっともっと芝居を楽しむことにつながるはず。演劇を目指す特に若い人たちには、この本がそんなことを考えるきっかけになればいいなあ。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

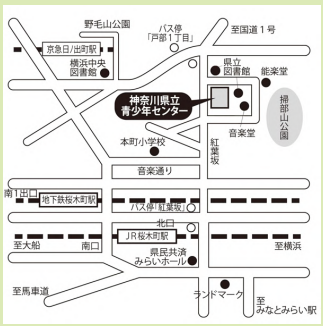


俳優・仲代達矢が、戦争体験や俳優座養成所時代、黒澤明らとの交流を通して、役者として生きる覚悟と役作りの本質を語る。演劇を志す人に多くの示唆を与える一冊。

演劇資料室

【開室時間】
平日（火曜～金曜）　13:00～22:00（貸出は21:30まで）
土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）
【休室日】
月曜、年末年始
※上記以外にも休室日がございます。
ホームページをご確認の上、お越しください。
〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ケ丘9-1
神奈川県立青少年センター2階　演劇資料室　電話：045-286-4485





神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

■演劇プロデュース『螺旋階段』　■クェル・ペッパー　■京浜協同劇団　■劇団河童座　■劇団唐ゼミ☆　■劇団コピュラ
■劇団年輪　■劇団820製作所　■劇団まきじゃく　■劇団横濱にゅうくりあ　■虚空環幻想レーゲンハイト　■Theater Company 夜明け
■theater 045 syndicate　■ドリル饅頭　■PAPmusic+　■プラスティックな月　■まりこ☆みゅーじあむ
■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)　■横浜小劇場（横浜演劇研究所附属）　■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 98号

[発行] 一般社団法人 神奈川県演劇連盟（2026年10月31日）
[編集] オッスたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）、
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳紘（劇団820製作所）、
中山朋文（theater 045 syndicate）、宮田信宏（劇団年輪）、こんのかつゆき（劇団コピュラ）
[ホームページ] https://kenenren.or.jp/

ホームページ